皇女と文学
——平安朝斎院文学圏と初唐公主文学圏へのアプローチ——

陳　燕

はじめに

平安時代、中宮や皇后を中心とする後宮サロンが形成され、女房文学が花を咲かせた。一方、大斎院選子内親王をはじめとする斎院達のもとにも、和歌に長じた女房が斎院を囲みながら頻繁に歌合など文学的活動を催す。後宮に劣らぬ美しきみやびの世界を築き上げ、いわゆる斎院文学圏が成されている。それは後の女流文学の誕生と深く関わっており、後宮を中心とする宮廷文学の延長線の上にあるものと見なされている。

それに対して、中国では、唐の初期、太平公主、安楽公主、長寧公主、玉真公主等、世に重きをなす皇女たちを中心とする文学サロンも一時流行っていた。公主達の別荘に文人が召されて、宴を開き詩会を催すことが度重なる。その時に賦した遊宴詩の数々が『全唐詩』に残され、初唐公主文学圏について検討する際の良き手がかりとなっている。

本稿は、上述平安朝斎院文学サロンと初唐公主文学サロンを対象にして、皇女の役割、歌人の構成、サロン間の関係等について検討し、二者の相違並びにそれを至らしめた原因をめぐって考察を進めてみたい。

一．平安朝の斎院文学サロン

嵯峨朝から、皇女有知子内親王を始めに、未婚の皇女が賀茂神社に斎院として奉仕するという制度が確立された。斎院には女別当・内侍・宣旨などの女性を始め多くの女官女房が仕えていた。また、歌人や貴族たちが出入りする風雅な社交場でもある。

稲賀敬二氏は、平安時代、家庭教育・芸術教育は、後宮・斎院・斎宮などの、高貴な女性を中心とするサロンに集まる貴紳才媛の社交場の中で行なわれている[1]と指摘している。『枕草子』第二十一段には、平安時代、貴族女性の文学教養がいかほど重んじられていたのか、村上朝の宣耀殿女御芳子の話を例として挙げている。芳子は、姫君時代から、父親に

> 一つには御手を習ひ給へ。次には琴の御琴を、人よりことに弾きまさらむとおぼせ。さては、古今の歌二十巻をみな浮かべさせたまふを御学問にはせさせたまへ。
>
> （『枕草子』 54頁）

と厳しく躾けられてきたという。殆ど同じような記述が『大鏡』にも載っている。当時上述のような教養を受けた貴族女性は数少なからぬはずである。大臣の娘より更に身分の尊い内親王クラスの斎院も勿論その中に入っていると言えよう。

従って、高い教養を身に備えた皇女を中心に集まるこの特殊な文学空間は、和歌の享受、物語の創作や受容の場として成り立ち、平安女流文学に大いに影響を与えていることと考えられる。次は、平安時代の代表的な斎院文学サロン——大斎院文学サロンと六条斎院文学サロンについて考察を試みる。

（一） 大斎院文学サロン

無名草子の作者は、その女性批評の中で、「昔のやうの宮はらの御有様、あまた承はる中に、大斎院こそめでたくおはしましけんとおぼえさせ給へ」（『無名草子』126頁）と記している。大斎院とは、村上天皇の第十女、選子内親王であり、円融・花山・一条・三条・後一条の五代にわたって斎院の職をあり続けた人物でもある。

選子内親王は和歌と縁が深く、自ら詠んだ和歌が『大斎院御集』、『大斎院前御集』、『発心和歌集』などの歌集に収められている。その歌才に関して、『今昔物語集』巻二十四第五十七話「藤原惟規和歌被免語」には、「和歌ヲナム微妙ク読セ給ケル」と高く評価し、大斎院の女房の所に密かに通っていた藤原惟規が警固の侍に怪しまれて門を閉ざされるが、女房のとりなしでなんとか門外に退出することができ、その際に詠んだ歌が大斎院の御感にあずかったという歌徳説話が載っている。また、『今昔物語集』巻十九にも、

> 斎院ニテ御マス間、世ニ微妙ク可咲クテノミ御マセバ、上達部殿上人不絶ズ参レバ、院ノ人共モ緩ム事無ク、打チ不解ズシテノミ有レバ、「斎院許ノ所無シ」トナム世ノ人皆云ヒケル
>
> （『今昔物語集』　510頁）

と語っており、大斎院が年を取り、住所も寂れてゆく中、ある日若い殿上人たちが、雲林院の不断の念仏聴聞の帰途に立ち寄り、大斎院と箏、琵琶の合奏をしてから帰るという逸話も書き留められている。

このような、風雅の溢れている世界に宮仕え生活を送っている女房たちは、文雅の志が深い大斎院を囲みながら、しばしば歌合を行い詠歌活動を楽しみ、一つの文学サロンを結成するに至った。『平安朝歌合大成』には、大斎院が主催者とする歌合が五回載っているが、歌の多くが散逸し、断片しか残っていない。前述の『大斎院前御集』、『大斎院御集』の二集には、和歌のみならず、女房との詠歌活動の光景も描かれており、サロンの展開を窺わせてくれる。才気ある女房達の集団指導にサロンの運営を任せ、大斎院は穏やかな包容力でその行動・企画を見守るという形を取っており、それゆえ、「サロンに属した女房に幻想にも近い誇りを抱かせる」[2]ということは、三田村雅子氏によって指摘されている。その誇りは、『紫式部日記』に、ある大斎院に仕えている女房の手紙に、

> 「歌などのをかしからむは、わが院よりほかに、誰か見知りたまふ人のあらむ。世にをかしき人の生ひいでば、わが院のみこそご覧じ知るべけれ」などぞはべる。
>
> （『紫式部日記』　194頁）

と記しており、紫式部の憤慨を誘う一節が見られる。

大斎院サロンに関する評価は、平安朝の他の女流文学作品に度々出る。平安朝、最も注目を浴びる文学サロンの一つとして、中宮定子文学サロンがある。そのサロンの中堅的な存在である清少納言は『枕草子』の中に時折、大斎院の話について筆を走る。八十三段、大斎院が定子に卯槌を添えた和歌を贈り、定子側が感激して受け止めた経緯を書き綴っている。また、二十四段、

> 宮仕へ所は内。后の宮。その御腹の一品の宮など申したる。斎院、罪深かなれど、をかし。まいて、余のところは。また東宮の女御の御方。
>
> （『枕草子』　463頁）

と斎院御所を素晴らしい宮仕え所として挙げる箇所が見られる。大斎院サロンと定子サロンの間に良き交流があったことが分かる。なお、清少納言は、「をかし」という言葉で彼女の脳裏にある大斎院イメージを浮かばせることにも、大斎院の常に中宮定子への心遣いが裏付けられていると考えられる。

また、平安時代、違ったサロンに所属されている女房らのあいだにも、それぞれ特殊な対抗意識に似たものが生じがちだと指摘されている[3]。先も少し触れていたが、『紫式部日記』には、大斎院に仕えている女房の手紙を覗き見てしまい、その独りよがりに書かれた手紙が式部のしゃくに触ったという一節がある。その手紙に続いて、下記のような評論が綴られている。

> げにことわりなれど、わがかたざまのことをさしもいはば、斎院より出できたる歌の、すぐれてよしと見ゆるもことにはべらず。ただいとをかしう、よしよししうはおはすべかめる所のやうなり。
>
> （『紫式部日記』　194頁）

さすがに直接大斎院に批判を浴びるまでは行かないが、さぞ腹立たしさを仄めかすような口振りである。かくように、微かであるが、サロン同士の間にはお互い競争意識を持っていたことが分かる。「我こそ」というプライドを胸に収め、より優れた作品を目指そうとする、そういう競争意識は、平安の輝いた女流文学を齎す源泉を成すダイナミックな「しずく」だと考えられる。その意味から見れば、平安朝文学史における大斎院サロンの存在感は大きいと言えるだろう。

（二）　六条斎院――禖子内親王文学サロン

大斎院の時代が終わり、時が平安中後期に下ると、六条斎院文学サロンが逸らすことのできない存在になってくる。「平安朝歌合年表」[4]によれば、後冷泉朝、五十五回に及ぶ歌合が開催されている。そのうち、女性を主催者とするものは三十一回を数える。しかも、その内圧倒的多数が、六条斎院としての禖子内親王家歌合と退下後の禖子内親王家歌合である。このゆえ、大斎院文学サロンに次ぐ、平安朝の「大役」斎院文学サロンと位置づけられている。

『栄華物語』には、禖子内親王に関して次のように語っている。

> 幼くおはしませど、歌をめでたく詠ませたまふ。さぶらふ人々も、題を出し歌合せをし、朝夕に心をやりて過ぐさせたまふ。物語合とて、今新しく作りて、左右方わきて、二十人合などせさせたまひて、いとをかしかりけり。明暮御心地を悩ませたまひて、果は御心もたがはせたまひて、いと恐ろしきことを思し嘆かせたまふ。
>
> （『栄華物語』　402頁）

体が弱いながら、心に歌への熱意が込められた禖子内親王像が紙上に躍如する。禖子内親王は、生後僅か九日で母親を後産で失い、姉の祐子内親王と共に祖父頼通に引き取られて大切に育てられたという。頼通が宇治関白左大臣と称せられ、後朱雀後冷泉期の歌合興隆期は、彼と土御門大納言師房家と結ぶ枢軸によって強化推進せられたものと指摘されている[5]。病弱の禖子内親王には、祖父頼通の後見援護なしでは、とても前述のような数多くの歌合を催すことができたとは考えられない。勿論、このような力惜しまぬバックアップには、前述の平安朝における貴族女性に和歌を教養として熟させる時代の流れとは深く関わっていると言えるだろう。

『平安朝歌合大成』に載っている斎院禖子内親王家歌合の多くは、禖子に仕えている女房の間で催されたものである。萩谷朴氏の指摘によると、十回以上出場した歌人は、斎院の女房として常に奉仕する人の可能性が高い[6]。その女房達の素養が高く、中には六条斎院宣旨と称せられ、『狭衣物語』を書き上げた才女がいるという。禖子内親王自らも「宮殿」という呼称で、歌合に出場することがある。ほかには、姉の祐子内親王家や二条中宮、四条皇后等の各宮から、歌合に参加した女房たちもある。このように、協調融和的な雰囲気の中で行なわれていた後宮各家の女房の自由な交流は、大斎院時代には殆ど見られなかった現象である。その交流は院政直前の貴族社会に最後の華麗な花を開いた文学圏を成したことに導くと稲賀敬二氏によって指摘されている[7]。

また、男性歌人の加わった歌合も見られる。永承六年夏に催された六条斎院禖子内親王歌合には、藤原伊周の息子である道雅三位、源頼国の男頼資、頼綱と三名の男性歌人が顔を出した。頼資は斎院の次官であるばかりでなく、その姉妹には前述の六条斎院宣旨があり、禖子内親王家には深い因縁があるという。女房の間で行われた歌合でも、男性歌人が出場した歌合でも、詠まれた歌について分析してみると、恋や自然などをテーマにするものが多いことが分かる。このように、斎院文学サロンは、主に歌を享受する場としての色彩が濃い。

（三） 平安朝斎院サロンの特質

前述のように、斎院文学サロンで行なわれた歌合は、歌人間の文学の教養、才能の競い合いの場だと言えよう。なお、斎院文学サロンは孤立しているわけでもなく、後宮文学サロンと互いに繋がりを持ち、能動的な関係を作っており、平安朝の女流文学に大いに影響を与えたことが分かる。斎院文学サロンは平安女流文学を育てた、もう一つの苗床だとも言えよう。

なお、ここに、平安斎院文学サロンについて検討する際、文学を貴族女性の教養として認めるという時代の流れがその成立、展開に大いに影響を及ぼしていることに改めて注目したい。

それに対して、初唐公主文学サロンはどうであろうか。侍女が詩会に出ることはまずなく、そのうえ公主自ら詠んだ詩も殆ど見られない。サロンの形として、男性文人が遊宴に召され、詩を賦すことが多い。平安朝斎院文学サロンと相当異質な文学圏はどのように形成され、そこにおける皇女の役割は何であろうか。次はそれについて検討を試みる。

二. 初唐の公主文学サロン

周知のように、唐の初期、一時期女性が政権を握っていることがある。太平の母君、武則天は世を治めた時、文章で人材を抜擢し、行幸する時も常に自ら詩を賦し、群臣に唱和させることが多い。以降、唐の皇帝が詩歌を好む人が多い。「帝（中宗）有所感即賦詩、学士皆属和。当時人所歆慕。然皆狎猥佻佞、忘君臣礼法、惟以文華取幸。」[8]、「于是天下靡然争以文化相尚、儒家忠讜之士莫得進矣」[9]の如く、帝が詩を好尚することは上述のような風潮を煽ぎたてることに至った。

こういう時代の流れに乗じ、多くの文人は時の権門――公主の所へ参り、公主を中心に文学サロンが結成された。例えば、昇平公主の家に時の「大歴十才子」が集まっており、時々詩会を催すことがある。その状況は、「毎宴集賦詩、公主坐視簾中、詩之美者、賞百縑」[10]と記されており、公主の家で行なわれた詩会の実態を窺わせてくれる。詩会が催された時、文人達は詩を公主に献上することが基本であり、公主自らは詩を詠まないことである。漢朝以来、女性は文才より「徳」を重んずるべきだという封建宗法社会の規範に関わっている可能性が高い。人の前で詩才を披露することが貴族女性として相応しくないという世の中だった。それゆえ、公主の残った詩が皆無に近いほど数が少ない。唐の時代、僅か宜芬、龍城二人の公主が三首の詩作を後世に残している。

では、詩を詠まない公主の門下に、文人達は何のために駆け込み、集まってくるのだろう。次は、初唐公主文学サロンで詠まれた詩作について検討を試みながら更なる追究を進めたい。

（一） 初唐公主文学サロンで詠まれた詩作

まず、太平公主文学サロンを例として挙げてみる。

太平公主が主催した詩会、またはその山荘で行なわれた詩会で詠まれた詩は、『全唐詩』には合わせて

十二首収録されている。十二首の詩には、八首に「鳳凰」、「鳳女」という言葉が出ており、公主を「鳳女」に擬えてその高貴な身分を強める。また、豪華極まる別荘を「仙家」に譬えて絶賛したり、「仙輿」、「鵲橋」、「雲漢」等の言葉を使って人々の思いを仙界に馳せ、そこに棲む仙人像を公主に重ね、公主の無上の美貌と気品を巧みに褒め称える。その上、「此日侍臣将石去、共歓明主賜金回」（『金唐詩』巻52)、「自有神仙鳴鳳曲、並将歌舞報恩暉」（『金唐詩』巻96）等、露骨に公主への諂いも詠まれている。

このように、これらの詩に託された主家への媚が溢れんばかりである。太平公主に限らず、それが殆ど類型になっていて、『全唐詩』に所存する、長寧公主、安楽公主等多くの公主宅で詠まれた詩も近似した雰囲気を伝えている。文人達は何が望ましくて、あれほど華麗な筆致を以って、知恵を絞り言葉を尽くして主家賛美に動かされたのでしょうか。次は、サロンを構成した公主と文人の関係について分析を試みる。

（二） 初唐文学サロンにおける公主の役割

太平公主は唐高宗、則天皇后腹の皇女であり、『新唐書』には「后愛之傾諸女」[11]と記されている。権謀に長じた太平は、則天皇后、中宗、叡宗に重んじられ、多くの政治事件に関与したことがあり、初唐の政壇に重きをなしていた人物である。「公主所欲、上無不聴、自宰相以下、進退系其一言。其余薦士驟歴清顕不可勝数、権傾人主、趨附其門者如市」[12]、「文武之臣、大半附之」[13]、「時宰相七人、五出主門下」、「於是推進天下士、謂儒者多窶狭、厚持金帛謝之、以動大議、遠近翕然向之」[14]等の記述より、政界への影響力が一目瞭然である。

また、太平公主と同じように、文人との交際がしばしばある長寧公主、安楽公主も権力を握っている人物である。長寧公主は「内倚母愛、寵傾一朝」[15]と言われている。その妹の安楽公主は、中宗の最愛の娘として一入優遇されていたという。『資治通鑑』には、安楽公主について、「朝士往々従之遊処、以求進達。安楽公主尤驕横、宰相以下多出其門」[16]という記述が見られる。

王維が玉真公主の山荘にて詠んだ詩に踏まえ、玉真公主は玄宗皇帝に、李白、王維を推薦したことがあると指摘されている[17]。玉真公主は玄宗皇帝の同腹の妹であり、道教に信心篤く、若い時から求道の暮らしを送っている。玄宗皇帝も道教に関心を持っているゆえに、玉真公主が玄宗に可愛がられていたという。『新唐書巻192・顔春卿伝』には、魏征の孫魏瞻が罪を犯して死刑と言い渡されたが、玉真公主の助けで死を免れたということが記されている。また、『新唐書巻204・方技伝』には、師夜光も玉真公主に推薦されて採用が決まったという話が見られる。

従って、初唐、帝に寵愛されて政壇で活躍していた公主は、官人の叙位昇進に相当影響力を持っていたことが考えられる。恐らく公主に近侍する機会を生かし、自らの文学才能で公主の歓心を買い、それを踏み台としてより高い位官に一刻も早く就きたいことが文人達の望みであろう。

（三） 公主と文人の関係

太平、長寧、安楽宅に出入りする詩人の中に、李嶠がある。初唐「文章四友」の一人として、「嶠有三戻：性好栄遷，憎人昇進；性好文章，憎人才華；性貪濁，憎人受賂」[18]と厳しく批判されていることが見られる。しかし、この李嶠は「在中宗朝又因依阿于武、韋及太平公主等，而享高位」[19]と『唐才子伝』に語られている。公主等の権門と関係を持てば、徳に乏しい文人でも昇進ができるという時代の様相が浮き彫りになっている。

また、宋之問という文人もよく公主たちの宴会に登場している。詩才の聞こえが高く、則天皇后から「錦袍」を賜ったことがあるという。「諂事張易之、坐貶滝州。後逃帰、匿張仲之家。聞仲之謀殺武三思、乃告変、擢鴻臚簿。遷考功郎。複媚太平公主」[20]と群を抜いた詩才の持ち主だが、常に権門顕貴に諂うところが世に蔑まれている。彼の権力中心への憧れによってつい自らの死をも招いてしまう。「景龍中、諂事太平公主；安楽公主権盛、復往諧結、太平深嫉之。中宗将用為中書舎人、太平發其贓、下遷越州長史、賦詩流伝京師。叡宗立、以獪険盈悪、詔流欽州、賜死」[21]という記述によると、太平公主のみならず、安楽公主の所へも度々参上する宋之問は、後に太平公主の恨みを買ってしまい、太平公主の謀りによって失脚された。この事件から、競争意識を持ちながら良性的な関係にある平安朝斎院文学サロンと異なる、初唐公主文学サロン間の厳しい政治闘争の様相も窺える。

そして、公主に抜擢された文人は、後に公主の力添えになることが見られる。「竇懐貞、崔湜、岑羲皆因公主得進」[22]と『資治通鑑』に記されており、先天二年（713)、太平公主はその竇懐貞、崔湜、岑羲等と結党し、太子暗殺のクーデターを企てたが失敗し、「賜死于第」[23]という非業な最期を遂げたという。

「驕れるものは久しからず」、太平公主のみならず、栄華を極めた安楽公主も臨淄王――後の玄宗皇帝のクーデターにより、「斬首」という惨めな死を迎えた。玉真公主も玄宗の時代が終わると、権力の舞台から姿

を消してゆく。世を去った公主に対して、後の文人はどのように評価するのであろうか。韓愈という詩人は、『遊太平公主山荘』という詩を残している。

公主当年欲占春、故将台榭押城闉。欲知前面花多少、直到南山不属人。

(『全唐詩』　巻344)

行間には、権力を笠に着て民を踏み躙る太平公主への強い批判が込められている。

前述のように、初唐公主文学圏は常に政治と関わりを持ち、文学の裏には政治の影が宿している。それゆえ、公主文学サロンの詩作は明るく振舞っているが、一種の重々しさも滲み出ている。それに照らして、『今昔物語集』巻十九に語られている、晩年の大斎院御所に訪れてくる若い殿上人達が大斎院と管弦を楽しむシーンがまさしく別天地として我々の目に映ってくる。

結び

平安時代、貴族女性が文学の担い手となり、今でも異彩を放つ平安女流文学を残した。中国の漢文学に深く馴染んでいたその時代、漢文学とは相当異質な女手の仮名文学は如何にして育まれてきたのか、それについて問いかけるとき、斎院文学サロンが一環として浮かび上がってくる。後宮という権力中心を離れたところで、斎院を始めとする一群の女性は文学を楽しむということは、実に平安朝女流文学の本質に関わるポイントだと思われる。

それに対し、二千年にわたる、中国の長い文学史において、女性作家は見過ごされてもおかしくないほど極小さな世界しか占めていない。女性によって書き綴られた作品は数が非常に限られている。譬え、皇女という高貴の身分をもっていたとしても。

だが、女性と文学の関係が全く切れていることは言えない。一見、上述の初唐公主文学サロンに関する分析はその政治性に偏っているようだが、その文学サロンが存在できたことは既に大きな意味合いを持っていると改めて注意したい。詩を詠むことのできない公主達は詩を求めていることには、常に文学への道を塞がられた、中国古代女性のどんな心情が隠されているのか、それはまたもう一つの大きな課題だと思われる。

本稿は、斎院文学圏と公主文学圏の外側に近づいたところに止まり、その中身、歌合で詠まれた歌、詩会で賦された詩について、十分な考察は進められていない。それを今後の課題として、更に深い追究を試みたい。

使用テキスト

(一) 中国語
1．[宋] 欧陽修・宋祈撰、『新唐書』、中華書局、1975年4月。
2．[宋] 計有功撰、『唐詩紀事』、上海古籍出版社、1987年7月新版。
3．[宋] 司馬光撰、『資治通鑑』、中華書局、1956年6月。
4．[元] 辛文房撰、『唐才子伝』、中華書局、1987年5月。
5．[後晋] 劉昫 (他) 撰、『旧唐書』、中華書局、1975年5月。

(二) 日本語
1．萩谷朴、『平安朝歌合大成』(巻一～巻五)、同朋舎、1995年5月～1996年12月。
2．桑原博史校注、『無名草子』、新潮社、1971年12月。
3．長沢美津編、『女人和歌大系』(巻2)、風間書房、1979年10月再版。
4．中野幸一校注・訳、『紫式部日記』、小学館、1994年9月。
5．松尾聡 (他) 校注・訳、『枕草子』、小学館、1997年11月。
6．馬淵和夫 (他) 校注・訳、『今昔物語集』小学館、2005年5月。
7．山中裕(他)校注・訳、『栄華物語』、小学館、1998年3月。

参考文献

(一) 中国語
1．宇文所安(著)賈文華 (訳)『初唐詩』、三聯書店、2004年12月。
2．徐有富、『唐代婦女生活与詩』、中華書局、2005年9月。
3．丁放、袁行霈、「玉真公主考論――以其与盛唐詩壇的関係為帰結」、『北京大学学報 (哲学社会科学版)』、2004年3月号。
4．鄧小南 (編)、『唐宋女性与社会』、上海辞書出版社、2003年8月。

(二) 日本語
1．稲賀敬二、「後宮・斎院・斎宮の女性」、『国文学解釈と鑑賞』1955年7号。
2．子内親王物語歌合』を中心に」、『国文学解釈と鑑賞』、1986年11月号。
3．工藤重矩、『平安朝律令社会の文学』、ぺりかん社、1993年7月。
4．鈴木知太郎、「後宮とサロンとの関係・対立中宮彰子――選子内親王」、『国文学解釈と鑑賞』、1962年6月号。
5．徳原茂実、「歌合の成立と展開」、(有吉保 [他] 編、『和歌文学講座5――王朝の和歌』所収、勉誠社、1994年12月)

6．三田村雅子、「女性たちのサロン――大斎院サロンを中心に」、『国文学解釈と鑑賞』、1989年８号。

注

1．稲賀敬二、「後宮・斎院・斎宮の女性」、『国文学解釈と鑑賞』1955年７号。
2．三田村雅子、「女性たちのサロン――大斎院サロンを中心に」、『国文学解釈と鑑賞』、1989年８号。
3．鈴木知太郎、「後宮とサロンとの関係・対立中宮彰子――選子内親王」、『国文学解釈と鑑賞』、1962年６月号。
4．萩谷朴、『平安朝歌合大成』巻五、同朋舎、1996年12月。
5．萩谷朴、『平安朝歌合大成』巻二、同朋舎、1995年11月。
6．萩谷朴、『平安朝歌合大成』巻二、同朋舎、1995年11月。
7．稲賀敬二、「後宮・斎院・斎宮の女性」、『国文学解釈と鑑賞』1955年７号。
8．［宋］欧陽修・宋祈撰、『新唐書』巻202、中華書局、1975年４月。
9．［宋］司馬光撰、『資治通鑑』巻209、中華書局、1956年６月。
10．［後晋］劉昫（他）撰、『旧唐書・李虞仲伝』、中華書局、1975年５月。
11．［宋］欧陽修・宋祈撰、『新唐書・諸帝公主伝』、中華書局、1975年４月。
12．［宋］司馬光撰、『資治通鑑』巻209、中華書局、1956年６月。
13．［宋］司馬光撰、『資治通鑑』巻210、中華書局、1956年６月。
14．［宋］欧陽修・宋祈撰、『新唐書・諸帝公主伝』、中華書局、1975年４月。
15．［宋］欧陽修・宋祈撰、『新唐書・諸帝公主伝』、中華書局、1975年４月。
16．［宋］司馬光撰、『資治通鑑』巻209、中華書局、1956年６月。
17．丁放、袁行霈、「玉真公主考論――以其与盛唐詩壇的関係為帰結」、『北京大学学報（哲学社会科学版）』、2004年３月号。
18．［宋］計有功撰、『唐詩紀事』巻十、上海古籍出版社、1987年７月新版。
19．［元］辛文房撰、『唐才子伝』巻一、中華書局、1987年５月。
20．［元］辛文房撰、『唐才子伝』巻一、中華書局、1987年５月。
21．［宋］計有功撰、『唐詩紀事』巻十、上海古籍出版社、1987年７月新版。
22．［宋］司馬光撰、『資治通鑑』巻210、中華書局、1956年６月。
23．［宋］欧陽修・宋祈撰、『新唐書・諸帝公主伝』、中華書局、1975年４月。

ちん　えん／北京外国語大学　北京日本学研究センター　文学コース　博士課程２年